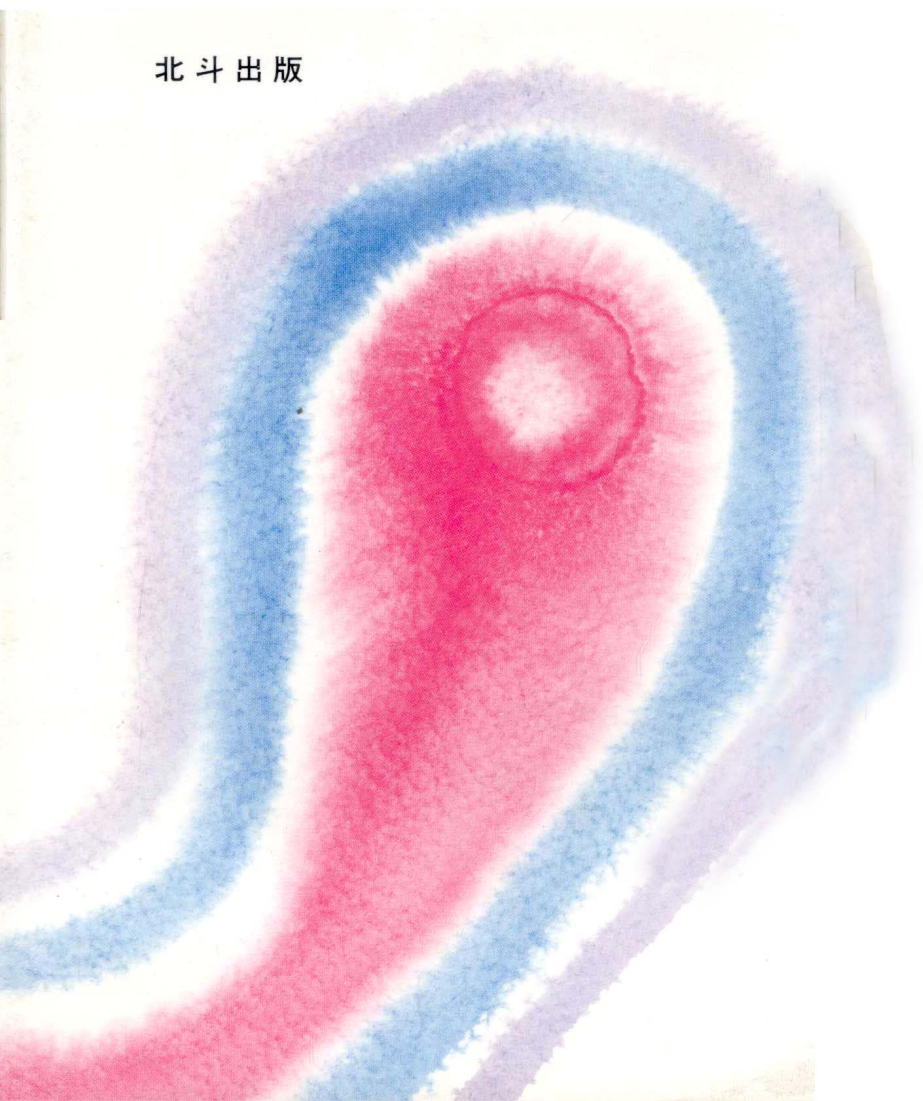


童話感覚 パート 2

佐野美津男

北斗出版



童話感覚パート2

さのみつお
佐野美津男

著者略歴

1932年東京に生れる。戦争のために12歳で孤児となり10代のほとんどもを放浪。従って義務教育未修了。10代の終わりから詩を書きはじめ、25歳から児童文学を中心とする文筆活動に従事。現在は相模女子大学で児童文学をはじめとする子ども関連科目担当の助教授でもある。

現住所、神奈川県相模原市御園 1—18—61

1979年 6月25日 初版第1刷発行 定価1300円

発行所

株式会社 北斗出版

〒101 東京都千代田区神田神保町 1—64

電話 (03) 291—3258 振替東京 6—27052

印刷 三和印刷 製本 三水舎

© 1979 Mitsuo Sano, Printed in Japan

童話 感 覚 パー ト 2

佐野美津男

童話感覺パート2

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

北斗出版

目次

空飛ぶ円盤は裏宇宙からやってくる	1
快傑高垣眸頭巾 かいけつたかがきひとみずきん	11
—— または時代の複製師	19
まんがのなかの教師たち	2
ナンセンスと子ども	37
自殺する子ども	44
性を語るのが難しくなった	49
	56

目次

空飛ぶ円盤は裏宇宙からやってくる	1
快傑高垣眸頭巾 かいけつたかがきひとみずきん	11
——または時代の複製師	19
まんがのなかの教師たち	2
ナンセンスと子ども	37
自殺する子ども	44
性を語るのが難しくなった	49
	56

柳田国男の子ども観

体験を与えない文学なんて

180 175

6

不思議の国たりうるかトーキョーは

189

現代の漂流者はどこにいる

203

あとがき

213

カット 山口みねやす

1



空飛ぶ円盤は裏宇宙からやってくる

宇宙についてなにかを語るつもりのところ、のっけから微小な私事をのべたてるぶざまを許してもらいたい。話のつじつまあわせの関係でこうするより仕方がないのだ。子ども向けのある雑誌に、空飛ぶ円盤を主題にした物語を連載中であって、第一部のタイトルが「空見ろ」で、現在進行中の第二部は「地見るぞ」となっている。これはもう読者の子どもたちというよりも編集者のあいだで大好評であり、このところ毎号続けて編集後記には、空飛ぶ円盤あるいは宇宙人の実在を裏付けるような——そういうおもいをこめた——文章が載っている。かれらは、わたしの、空飛ぶ円盤への執拗なまでの探究心に共鳴して（あるいは毒気に当てられて）いわばオルグられてしまったのだ。

ところで連載中の空飛ぶ円盤物語だが、これはタイトルからも推測できるように、第一部では地球人による空飛ぶ円盤研究の行動が素材になっている。しかし第二部では全く逆に、空飛ぶ円盤の側からの地球の考察がおしすすめられているのである。現時点までのさまざまな空飛ぶ円盤研究の成果を集約的に考えた場合、空飛ぶ円盤が無人の飛行物体であるとは断定できないわけだから、その塔乗員たる「宇宙人」を構想するのは当然のこととなり、従ってわたしもそれをやっているのだ。

かつて神秘の文学者・埴谷雄高は、記録映画「地球は青かった」に触れて次のように書いた。埴谷雄高は稲垣足穂とならんで、宇宙へのすぐれた考究心とそれを基調としたところの莊重な瞑想を持ち続けている人であるから、その独創的な宇宙観からは多くの事柄を学びうるのである。

へ暗黒の空に浮んだ緑色の円盤である地球のすぐ間近かな周辺を衛星船《ポストーク号》の進んでゆく軌道が黄色い線で示される詩的な画面が、この記録映画のなかに幾度もでてくる。その美しい解説画をながめていると、新しい事柄のすべての端緒に通有であるところの感動的なものと滑稽なもの、驚嘆すべき成果と愚かしい無自覚がともに緊密にないあわせれ共存しているといった事態から、この素晴らしい軌道飛行もまたまぬかれていないことがたちまち解る

のである。さながらキティ・ホークではじめて五十九秒飛んだライトの飛行機の低い滑空のように、私達のポストーク号はほとんど地球の表面すれすれのところを飛んでいるのであって、この映画のなかの美しく彩色された解説画のように、無数の星のまたたく暗黒の空間の彼方に一つの孤独な円球、すなわち私達の地球が寂寥のうちに浮んでいるといった幻想的な情景を見得るまでにはまだまだ多くの年月の推移を待たねばならないのである。(三)新書『闇のなかの思想』

壇谷雄高が「多くの年月の推移を待たねばならない」といった「それ」を、かなり以前から待つこともなしに見ている者が存在するのではないか、というような発想から、わたしは空飛ぶ円盤を考え、それを「地見るぞ」というSFに仕立てあげることにした。わたし自身が空飛ぶ円盤を目撃したことがあるので、その形状や動きかたについては、描写上の不安はない。平野威馬雄が『それでも円盤は飛ぶ』その他で書いているように、空飛ぶ円盤は、

「飛行中における左右への奇妙な揺動は、ちょっと一義的には説明しにくい。しかし、これをもっとはげしくジグザグ飛行をしたとか、数秒ごとにバックをくりかえす、といった報告が円盤目撃例の中にはかなり多いし、またこういう飛び方が、地球的な航空機概念にあてはまらないことはたしかだし」という具合に飛ぶものなのである。

けれどわたしは接触者^{コンタクト}ではないから、空飛ぶ円盤がどこから、どのような目的で飛来してくるのかについては定かでなく、ためにその描写は想像力のあらわれの範疇を出ない。かくて空飛ぶ円盤物語の結末がどうなるかはまるで見当もついていないのだけれど、近頃ようやく考えついたのが《裏宇宙》というものの存在なのだ。

まだ比較的最近のことだが、日本の若い物理学者がアインシュタインの「相対性理論」の数式を解明したという報道があった。その結果、理論的には実在するといわれながら、その所在が確認されないままに至っているブラックホールと俗称される「星」が発見される可能性が出てきたというのである。あまりにも引力が強すぎるために、なにもかも吸いこんでしまい、ぽっかり黒い穴のように見えているはずだという星が、ブラックホールであって、それこそ天文学的に星の数ほどあるおびただしい星のなかでも、すぐれて神秘的な存在とされてきたわけだ。いふなれば宇宙のツチノコである。

ブラックホールの強大な引力にひきつけられ、吸いこまれてしまった物質はどうなるのか。正常な科学理論からいえば、その物質の構成分子の変化による消滅が考えられる。人間が死によって物理的にも不在となりうるように。だがもっとさらに単純な考えかたをそこに当てはめるならば、ブラックホールは文字どおり宇宙に穿^{うが}たれている黒い穴であって、そこに物質が吸

いこまれるというのは、台所の流し台や風呂場の排水孔に水やごみが流れこんでゆくのと同様の事象かとも推察されるのである。たまにはナスのへたや飯粒が流れこむように、小さな星もブラックホールに吸いこまれてしまう。小さな星といっても、そこは宇宙のことだから、地球よりはよほど大きな場合もあるだろう。そしてそれが消滅しないと、ナスのへたや飯粒が流れてどこかへゆくように、星も流れる。

さらに単純素朴に考えよう。古代ギリシャ人は、天体の運行を動力によるものと想像したらしい。そのころの絵に、空の裏側の機械に男が油をさしているというユーモラスなものがある。空の裏側の機械によって、天体は規則正しく動いているのだと古代ギリシャの人びとは想像したようなのである。それとは違いかたちで、わたしはブラックホールに吸いこまれた星やその他の物質の行方を考えて、われわれの地球がある宇宙を、仮に表宇宙とするならば、裏宇宙の存在が充分に構想できると思った。

そこではブラックホールが排水孔ではなくて取入口となり、おびただしい数の星がいかにもそれらしく光り輝きながら流れこみ、たゆたうているのであろう。そしてそのなかの幾つかには生物が棲息しているだろうことは、考えるなというほうが無理なくらい妥当である。

もともと表宇宙に存在したときから生物が棲息していて、その叡知の総力をあげてブラック